

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

ハイスクールB×D

【作者名】

厨二辰

【あらすじ】

ある日突然自分の中に別の人格が複数宿った主人公《西園寺誠》
その人格とは別世界でボスと言われ主人公達を苦しめたキャラ達
だった

それによりこれまで平穩に暮らしてきた生活は一変八チャメチャ
な生活へと早変わりしていく

どんどん悪い方向へと進んで行くことになってしまう

ストーリーは原作通りになりますがあくまで主人公はオリキャラ
になりますので主人公視点で話が進んで行く事になります

よろしくお願いします

目覚めの時

《自覚

せよ、目覚めの時は近い》

目覚ましの音で目を覚ます

最近夢の中でずっと誰かが囁いてくる

最初はボソボソと聞き取れないような声だったのが今でははっきりと聞き取れるようになってきた

「本当、なんなんだろうな、あの夢って」

そう言いながら学校に行く準備を始める

おっと自己紹介が遅れたようだ

俺の名前は西園寺誠

駒王学園に通う二年生だ

彼女いない歴〃年齢の冴えない男だ

ただでさえ冴えないのに関わらず幻聴のような夢まで見るなんて
どんな厨二病患者だよ

自分の事ながら気持ち悪く思えるぜ…

しかも最近では夢だけじゃなくて起きてても聞こえるようになってきやがった怖い怖い

まあそんなこんなしてるうちに準備が出来たし学校へ向かいます

か

《我らの声を……》

あつという間に放課後だ

これでも勉強はできる方だ

まあそんな事はどうでもいい

昼休み例の三バカデルタフォーエースがまた問題を起こしたようだが

俺には関係ない

そう関係ない

あいつらとは中学から同じだが関係ない

関係ないのだがその三バカの一人兵藤一誠に彼女が出来たという

噂が流れた

俺は耳を疑った

まさかと思っただ

なにか裏があるだろうと確信した

この確信が俺の人生をめちゃくちゃにしてしまう事になるのだが

…

かといって別に俺はその彼女さんとやらに直接、

「あいつのなにか狙いだ？」

などと聞きに行ったりしたわけではない

たまたま小腹が空いたのでたまたまコンビニに向かっていたら
たまたま一誠と件の彼女が居たのでたまたま気になってたまたま後
ろをつけていっただけである

《我らを認めよ...》

またあの幻聴みたいなのが聞こえた気がしたが気にしなかった

一誠の後をつけて公園に入ったなにか話しているようだった

するといきなり彼女が一誠に向かって死ねと言いながら光の槍で

一誠の腹を突き刺したんだ

一誠の腹から血が噴き出す

そりゃそうだあんだだけ大きな穴が空いてりゃ血も噴き出す

俺は一誠の元に駆け出した

「おい！一誠！大丈夫か！」

俺は叫びながら一誠を抱える

「ま...」と.....か？」

「今は喋んな！救急車すぐ呼んでやるから！」

と携帯を取り出し電話をかけようとしたとき俺の携帯がスパンと
消えた

「勝手な事、しないでくれるかしら？」

と一誠の彼女が言ってくる

言い返そうとした時、俺はその光景に絶句する

さっきは一誠の影になって見えなかった背中に羽根が生えている

「黒い……羽根……だっ？」

思わず口に出してしまう

それくらいには常識の範囲外の事だった

「おいおい、俺の頭はどうしちゃったんだ？」

「別にどうもしてないわ、これは現実でその男は私に殺された。これは紛れもない事実なのよ」

「なんでこいつが殺されなきゃなんねえだ！なにもしないだろう」

この女に向かって叫ぶ

そりゃそうだ、仮に一誠が大量殺人者でその裁きとして殺されるとかなら俺も納得する

だがこいつがやったのはあくまで覗きくらいだ
殺されるほどのことをした覚えはない

「理由？それはその子が私たちにとって危険因子だから早めに始末させてもらっただけ、恨むなら神器をその身に宿した神を恨んでちょうだいね」

「神器……？」

その名前を聞いた時俺は激しい頭痛を感じ思わず蹲る

「」の感じ……まさか、あなたも神器持ちだったっていつの？」

黒い天使がそう驚きながら光の槍を構える

「ならここ」で始末しないと後々めんどろね」

と光の槍を俺に向かって投げようと振りかぶる

その時俺の意識の中で俺を突き飛ばし誰かが俺の身体を乗っ取った

「だから…死んでちょうだい！」

「断る」

その手には光る剣が握られており光の槍をその剣で弾いていた

「なんなの…その剣は…なんなのよあんたは！」

本能的にヤバイと確信した黒い天使は逃げるように飛び上がりながら叫ぶ

男はただ静かにこう答えた

「ゲルドの王だ」

そう答えた男は殺気を黒い天使に向けて放つ

その殺気に完全に怯えた黒い天使は

「覚えときなさいよ！あんたは必ず殺してやる！」

と捨て台詞を残し逃げていった

その様子を男はただじっと見つめていた

そして後ろから現れた紅髪の少女へと振り返りその顔を見つめる

「私を呼んだのはこの子ね？」

「知らぬ、私はただこの身体の主を守っただけだ、この身体がだめになると困るのでな」

「そう…とりあえずこの子は私が預かるわ、異論は無いよね？」

「勝手にしろ、そろそろこの身体の主の方が限界なのでな出来ればこいつも寝床まで送ってくれると助かる」

「そう…その願い聞き入れましょう、対価はこの子を助けたという事実という事にしておくわ」

「では頼んだ」

と言うと誠の身体が限界というように糸の切れた操り人形のように崩れ落ちた

《目覚めた、混沌が、覇が、秩序が》

白覚

目覚ましの音で目を覚ます

そして昨日のことを思い出す

「確か…一誠が殺されて、それで俺も殺されそうになって、それで…そんなふうになったんだ？」

必死に昨日の事を思い出そうとするが神器という言葉聞き頭痛がしてからの事が一切思い出せない

全てが謎のまま時間が来たので学校へと向かう誠

その時に俺は信じられないものを見た

兵藤一誠だ

明らかに一日で治るような傷ではなかった

のに関わらず普通に学校で授業を受けている

明らかにおかしい

だがその事が分かるのも俺だけ、しかも黒い羽根を生やした天使に

一誠が殺されたなんて言っても誰も信じやしないだろう

だから俺は放課後こいつと一緒に帰ることにした

このもやもやをなんとかして晴らしたかった

「なあ…一つ聞いていいか？」

俺が聞く前にこいつから聞いてきた

「ちよつとよかった俺も聞きたいことがあるんだ」

「俺、彼女いたよな？」

俺は、はっ！とした表情を浮かべた、そう浮かべてしまった

「だよな！俺に彼女いたんだよな？」

その表情から答えを感じとった一誠はさらに詰め寄ってきた

「あ、ああ黒い、天使みたいなやつ…だろ？」

「そう！夕麻ちゃん！」

「お前を殺した…黒い天使の事だろ？」

え？という表情を浮かべる一誠

「俺は確かに見たんだ、お前の腹が空くところを、お前の腹から明らかに死んでしまっただけの血が噴き出すところを！」

「なに…言ってるんだ…俺は…生きてるぞ？」

「だから夢だと思ったんだ、お前が生きてるから、でも確かに俺はその夕麻ちゃんつてのを見た。そして、俺も殺されそうになった」

「なん…だって？」

今になって気付いた

今話している場所は昨日の公園だった

その時、背筋に冷たいものが走った

一誠も同じような感覚を得たようだった

2人してゆっくりと振り返る

黒い羽根が舞う

「カラスの…羽根か…？」

一誠が呟く

だが俺は知っているこれと同じような羽根を俺は見ている

「これは数奇なものだ。こんな都市部でもない地方の市街地で貴様のような存在に会うのなものな」

俺達の前に現れたのは黒い羽根を生やしたスーツの男

明らかに昨日の女の関係者だろう

「お前の属している主の名を言え。こんなところでお前たちに邪魔をされると迷惑なんぞだ。こちらとしてもそれなり…まさか、お前、『はぐれ』か？主なしならば、その困惑している様も説明がつく」

いきなり現れてそして明らかに一誠にだけを目の敵にして話して

いる

俺は完全に無視…悲しいねえ

「ふむ。主の気配もなし。消える素振りも見せない。魔法陣も展開しない。状況分析からみると、お前は『はぐれ』か。ならば、殺しても問題あるまい」

などと、明らかに厨二病のような事を口走る男は手をかざす

狙いは完全に一誠だ

耳鳴りがする

俺はこの現象を昨日見た

光の槍が男の手に形成されていく

「槍かー…やっぱりー」

一誠が叫ぶ

一誠を突き飛ばそうと動こうとした時には一誠の口から大量の血が吐き出される

その光景を見た俺は何かのスイッチが入ったように誰かと人格が入れ替わった

「なるほど、光の槍…と言ったところか、面白い技を使うもんだね、アッハ」

一誠の腹に刺さる槍を見て眩き、笑ながら手を叩く

今は俺の意識もちゃんとある

だがあくまで俺の身体を操ってるのはこの男だ

「貴様、何者だ？」

突然様子が変わり纏う雰囲気が変わった事に疑問を持ち問いかける男

「私か？ そうだね、モッキンバードとでも名乗っておこうかな？ アッハ」

「貴様、おちよくっているのか？」

「やだなあ…変わった力を持つてるから愛してあげようと思ったけど気が変わったよ」

と言いながら男に向けて走りだそうとした時である

「止まりなさい」

紅色の髪の少女が凜とした声で2人を止める

「紅い髪…グレモリー家のものか」

男が憎々しげに少女を睨み付ける

「リアス・グレモリーよ。ごきげんよう、堕ちた天使さん。この子達にちよっかいを出すなら容赦しないわ」

リアス・グレモリー

駒王学園に在籍しているなら知らない人は居ない位の有名人である

そんな彼女がヤバイ奴と話している

「アッハ つまんないから下がるよ」

とモッキンバードと名乗った男は俺の中に戻って行った

そんなやりとりを俺の中でやっている間に話が付いたようで男は下がって行きその話の一誠は気絶したようだそして

「」の子の家分かる？」

と聞かれたので素直に家を教えた俺は明日使いの者を出すから説明はその時にということでこの場はお開きという形となった

自宅に帰り俺は自分の中に問いかける

お前達は何者だ？」と

答えは何も返ってこない

ただ一つ返ってきたのは

『俺たちはお前の一部でお前は俺達の一部だ』

というよくわからない答えだけだった

とりあえず明日先輩に聞こう、わからない事全部

俺の中のこいつらのこと、死んだはずの一誠のこと、そして黒い羽根を生やした連中のこと全部

納得できるだけの事を、全部話してもらおう

そう思いながら俺は眠りについた

認識

今日は目覚ましよりも先に目が覚めた
理由は夢のせいだ

何も無い真っ暗な空間に俺と顔も見えない人達が俺を囲むように
ズラリと立っていた

別になにかされたりしたわけじゃない

ただ凄く…怖かった

一人ひとりが纏っていた雰囲気ってやつがとても不気味で重くて
なによりさみしそうだった

あの人達は俺に何を伝えたかったのか…

そして俺に何をして欲しかったのか…

俺には分からないけれど、あの人達の力になれたらいいなって思っ
たんだ

そして時間になったから学校へ向かっているとなにやら生徒達の
様子がおかしい

どうやら一誠とリアス先輩と一緒に登校してきたようだ

そりゃ学校も騒ぐもんだ

普通で考えたらあり得ないカップリングだからな

そして一誠は松田、元浜とバカ騒ぎを起こしていた

ほんとこの3バカデルタフォーをどうにかして欲しいと切実に
思っ

放課後、一誠と俺の元に同じ学年の木場裕斗がやってきた

一誠はモテるこいつが嫌いなようで

「で、何かのご用ですかね？」

とそっけなく返すが木場は変わらず笑顔のまま、

「リアス・グレモリー先輩の使ってきたんだ」

と続けた

俺と一誠は顔を見合わせて頷くと

「OK、OK、んで俺達はどうすればいい？」

「僕についてきて欲しい」

と言われたので木場についていく

後ろから女子の悲鳴やらなんやらが聞こえた気がしたが気のせい
だろう

俺達は木場について向かった先は、旧校舎だった

「ここに部長がいるんだよ」

と言われ一誠と共に部長？と首をかしげる

そして校舎内に入り階段を上り、ある教室の前で立ち止まる

そこには『オカルト研究部』とプレートがかけられていた

「部長、連れてきました」

と木場が中に確認を取ると

「ええ、入ってちょうだい」

とリアス先輩の声が聞こえてきた

どうやらリアス先輩は中にいるようだった

そして中に入った瞬間俺は絶句した

室内、至る所に書き込まれた謎の文字

そして教室中央にある魔法陣のようなもの

顔が引きつっているのが自分でもわかる

俺の中で誰かが喚いていたが気にしない

教室の中を見渡しているとソファに小さな女の子が羊羹を食べていた

こっちに気付いたので視線が合う

「こちら、兵藤一誠君と西園寺誠君」

と木場が紹介してくれる

それにあわせてぺこりと頭を下げってくる女の子

「誰？」

と小さな声で一誠に聞く

「え、お前しらねえの？」

「知らねえよ、下級生なんて」

とやりとりをしていると横から木場が

「塔城子猫ちゃんだよ」

と紹介してくれた

「ちゃんね」

と礼を言う

そんなやり取りをしていると奥からシャワーの音が聞こえてきた
なんか色々常識の範囲外でございます、ありがとうございます

そして奥で着替えているようだったので俺はソファの一つに腰掛ける

その時に小猫ちゃんが一誠に向かって何か言ったようだがうまく聞き取れなかった

そして、濡れたままの髪で制服を着込んだリアス先輩の姿が奥から現れた

後ろにはリアス先輩と共に「大お姉様と称される姫島先輩もいた

「あらあら。はじめまして、私、姫島朱乃と申します。どうぞ、以後お見知りおきを」

丁寧な自己紹介をされたので

俺たちも同じように自己紹介する

「どいつもはじめまして、二年の西園寺誠です」

「お、同じく二年の兵藤一誠です。こ、こちらこそはじめまして」
と挨拶を交わす

「これで全員揃ったわね。兵藤一誠君、西園寺誠君。いえ、イツセーと
ム」

「はい」

「私たち、オカルト研究部はあなたたちを歓迎するわ」

「あ、どうも…」

「悪魔としてね」

えっと、天使の次は悪魔ですか？

なんでもありませんねありがとうございます

そのあと明らかにファンタジーものの話のようなものを聞いたが
天野夕麻の話が出た途端に話しは急展開する

「あの日、あなたは彼女とデートして、最後にあの公園で光の槍で殺さ
れたのよ」

その言葉に俺ははっとする

確かに俺は一誠の腹に穴が空くのを見ただけど

「でも！俺は生きてるっすよ！だいたいなんで、俺が狙われるんだよ
！」

と一誠が叫ぶ。けど俺には心当たりがあった

「神器…」

と呟く

「そう、神器とは特定の人間の身に宿る、規格外の力。たとえば、歴史
上に残る人物の多くがその神器所有者だと言われているんだ。神器
力で歴史に名を残した」

と木場が口を開く

「大半は人間社会規模でしか機能しないものばかり。でも、中には私
達悪魔や墮天使の存在を脅かすほどの力を持った神器があるの。」

と説明を受け、リアス先輩が一誠になにやらさせはじめた

すると一誠がドラゴン波の構えをとりそれを放った

思わず笑い出してしまったがその笑いもすぐに消え失せた

一誠の左腕が光だし赤い籠手のようなものが装着されていた

「それが神器。あなたのものよ。一度ちゃんとした発現が出来れば、あとはあなたの意思でどこにいても発動可能になるわ」

「はああ、見た目は痛い子だけどなあ」

と思わず口にしてしまっ

「イツセーはその神器を危険視されて墮天使、天野夕麻に殺されたの」

「でもなんで俺生きてんすか？」

「イツセーが呼んだのよ、この紙から私を召喚してね」

「そして召喚された時には墮天使は追い払われ、あなたは死ぬ寸前、だから私はあなたを救うことを選んだ」

「じゃあ次の日普通に学校に居たのはリアス先輩のおかげだったわけだ」

「そう、悪魔として、イツセーあなたはリアス・グレモリーの眷属として生まれ変わったの、私の下僕として」

その時俺たち以外の皆の背中きら羽根が生える

そして隣の一誠からも羽根が生えた

「おいおい、俺はこの世の終わりでもみてんのか？」

と口に出す

どっちら凄いくことに巻き込まれたようだ

「あ、リアス先輩、神器がどんなものかわかったんですけど、なんで俺は呼ばれたんですかね？」

「ええ、それも話さなくてはいけないポイントよ」

「マ」ト、あなたにもその神器が宿っているの、それもかなりヤバイ神器が」

「ヤバイ…っどっついつ意味ですか？」

自然と声が震えているのが分かる

「なに、そこまで構えなくても大丈夫。でもあなたの神器は今までに発現した事のある神器とは違うの」

「違う?」

「ええ、恐らくあなたの神器は歴代の所有者の人格を自分に憑依させるもの、と推測されるわ」

とリアス先輩が自分の考えを口にする

しかし誠が返したのは否定の言葉だった

「残念ですがその考えは間違っていますよ、リアス・グレモリーさん」
静かに否定する

「私達は歴代所有者なんかではありません」

いきなり雰囲気が変わった俺にオカルト研究部のみんなから警戒される

「そこまで警戒しなくても大丈夫ですよ。今の私にはあなた方に敵対する意思はありません」

「あなたは、誰?」

とリアス先輩は疑問を口にする

「これはこれは自己紹介が遅れ申し訳ありません。私はシュナイゼル・エル・ブリタニア、ブリタニア王国の第二王子です」

「ブリタニア王国?聞いたこと無いわね…」

とさらに警戒を強めるオカルト研究部の面々

「ええ、それが答えですよ。リアス・グレモリーさん」

「どつという意味かしら?」

「私は確かにブリタニア王国の第二王子です。ですがあなた方はブリタニア王国を知らない、つまり私は別の世界の住人、ということですよ。勝手な推測になります。恐らく彼、西園寺誠君が宿した神器とやらは別の世界の住人の人格を自分に宿しそれを自分の身体を媒体として使役する、といったものでしょう」

「なるほど、一理あるわね」

「ご理解いただきありがとうございます、それではあとは任せましたよ」

とシュナイゼルが言うとソファに誠が倒れる

「多分まだ別の人格に身体を使われることが慣れてないからよ、今は休ませてあげましょう。彼が目覚めたらさっきの考えを説明しましょう」

とリアス・グレモリーは誠に毛布をかけてあげた

覚醒

《我らの目覚めは近い、自覚せよ、認識せよ、そして、理解せよ。我らが主よ》

その声に反応して飛び起きる

俺が最後に見た時間から一時間ほど経過していた

つまり俺は一時間ほど眠っていたことになる

俺は今の夢を思い出そうとした

けどそれはリアス先輩の一言によって遮られた

「おはよう、マコト。早速で悪いのだけどあなたの神器についての話があるの」

「俺の神器、すか？」

それはさっき先輩が説明してなかったっけ？

歴代所有者がどうたらって

「それは違ったよつなの」

「違った？どついつことすか？」

素直に聞き返す

「さっきあなたの中のシュナイゼルという人が現れてね。大まかな能力についての考察を受けたわ。あなたの神器は別世界、つまりパラレルワールドといえる数ある世界の中の人の人格をあなたを媒体にこの世界に発現させる、またはそれに近い効果を持った神器、であると推測されるわ」

「別世界の…人の人格を…？」

何言っただ？って素直に思った

でも墮天使の男に襲われた時に変わったモッキンバードって人
あの人に人格が変わった時身体の中の何かが変わったのはわかっ
た

なにが変わったのかはわからなかったけどそれを俺は説明した

「身体の中になにか…」

とリアス先輩は考え込む

「なんか…血が騒ぎ出したみたいな感覚が…」

「血が…別世界の技か何かかしら…あなたは吸血鬼とは違ってみたいだ
し」

「あの時何かする前にリアス先輩が止めたのでどうかはわからないで
すけど…一誠の血を嬉しそうに舐めた記憶はあります」

「まあこの話はとりあえず」ここで終わりますよっ」

と考えても終わらない話し合いに終止符を打つ

それから数日間俺は今までと変わらない日を過ごした

一誠の方は色々あったようだけれど…

ある日の夜、俺は小腹が空いたので真夜中だがコンビニへ行って食
べ物を購入した

帰り道に近道をしようと思夜中なら誰も通らないような場所を足
早に歩いていた

その時だった、背後から嫌な気配がしたので俺は走り出した
すると俺が歩いていた場所に大きな音がした

「人間だ…人間！」

俺は振り返ってその正体をみて驚き、腰が抜けてしまった

そこにいたのは巨大な獣の体上半身は裸の女性という異形のモ
ノがいたからだ

「ば…バケモノ！」

「貴様はそのバケモノに喰われて終わるのさあああ！」

と両手に持った槍らしきもので俺を刺そうと構えた

「なんでこないだから槍ばっかに狙われるんだよー！」

と嘆きながらガムシヤラにバケモノから逃げ出す

情けなくたっていい、生きなきゃ意味がない

「逃がしはしないよおおー！」

と槍を投擲するバケモノ

しかしその後待っていたのは投げたばかりの槍で自分の手を貫かれたバケモノだった

「舐めてンじゃねエぞ、ニ下アアア」

とある世界で第一位と恐れられた白い悪魔が本物の悪魔に対して牙を向けた瞬間だった

いきなり雰囲気が変わり、尚且つ自分がわからない位のスピードで反撃を受けたバケモノは狼狽える

だがその僅かな隙を逃すほど学園都市第一位は甘くは無かった

「甘エ、甘エぞ」

足元のベクトルを操作しバケモノに向かって跳躍、そしてその勢いそのままに全てのベクトルを操り一撃必殺とも言えるパンチを繰り出す

「人間風情がああああ」

と雄叫びをあげながらたちあがる

「この悪魔バイザー様が貴様を食らってやるわああああ」

「三下程度にこの俺がやられっかよオ
と相手に突っ込んで行き

「姿形は違えど体組織は変わんねエだろ」

と血が出てる部分に手を触れ

「血を逆流してヤンよ、安らかに死ね」

と自身の反射の能力を発動させる

それにより傷口から流れていた血の向きが反転

本来ならばあり得ない流れにより身体が耐えきれなくなる

「ついでに体に流れてる電気信号も逆流させておいてやった。ま、声は聞こえて無いだろうがよ…」

と悪魔バイザーに背を向けて人格を誠自身に返した時である

誠の体が手によって掴まれる

「かはっ！」

その力の強さに思わず吐血してしまう

掴んできたのは悪魔バイザーだった

悪魔バイザーの手に誠の吐いた血が付いていく

「捕まえたぞ人間シンナー！」

と誠を高く持ち上げながら吠える

「貴様は食わない、このまま叩きつけて殺してやる」

完全に怒りに飲み込まれた悪魔バイザーは誠を叩きつけるべく振りかぶり地面に向けて投げ放つ

だがその試みも失敗に終わった

誠の腕には鋭利なもので切られた後がありそこから刃のようなのが伸びておりそれを地面に刺して地面にぶつかるのを防いだのだ

「アッハ」

手を叩きながら笑う誠に対して恐怖とは言えない何かが悪魔バイザーを襲う

「貴様、何者だ」

始めて襲う得体の知れない悪寒に悪魔バイザーは誠に向けて問いかける

「今回は周りに人もいないみたいだし…名乗ろうかな」

と後ろの茂みを気にしながら答える誠

「咲神トトと言いたいところだが剥切燐一郎と答えよう」

そつ名乗る誠

今の誠は誠であって誠でない

別の人格が誠の身体を支配し、操っているのだ

普段の誠の戦闘能力とは全く違つたため普段の誠を知っているものから見れば一目瞭然であるが悪魔バイザーはそれを知らない

「悪魔という存在には80関心だが君という存在には0関心、つまり無関心だよ」

と言いながら指を鳴らす

それを合図に下半身の獣の手についていた誠の血が燃え上がる

「Condor Candle」

とある眠れない爺さんが宿した罪の枝の能力を使う誠

その炎に焼かれる悪魔バイザーは叫び声をあげながらのたうちまわる

「やはり貴様は0関心だ」

と両方の手のひらから刃を伸ばして眉間に突き刺し横に引き裂き完全に絶命させる

その時背後の茂みからリアス・グレモリー達が現れた

「あなたは誠ではないわね、その身のこなしからして…モッキンバー

ド、と名乗った人であつてるかしら？」

と問いかける

「アツハ、覚えてたのかい、聞けば君達も悪魔だそつじゃないか。80関心、いや人型も存在するのか…90関心だね」

と嬉しそつに近寄る誠、だがそれを許さないリアス・グレモリーは「あなたか誠を助けてくれたのは礼を言つわ。けれどそれとこれとは

話が別よ。あなたには私達には近寄らないで、あなたからは危険な匂いがプンプンするわ」

と、剥切の人格が入った誠を拒むリアス
後ろの眷属達からの視線も厳しいようだ

「アッハ」

と笑う誠

「まあ君たちに何かしようとするればこの子が黙ってないからね。もうこの子は私達を任意で呼び出す位には身体が慣れてしまったからね。呼び出すことが出来るなら追い出すことも可能だからね」

「どういふこと？」

「今僕を呼んだのはこの身体の持ち主、西園寺誠だよ」

「え…」

と驚愕するリアスとその眷属達

「確かに一度目に襲われた時にはこの子は呼び出すことは出来なかった。けれど、危機的状況には変わりなかった。」

「つまりその危機的状況が、彼を成長させた？」

「そういことだ。この子の成長には1000関心だよ」

と両手を広げながら笑う男

「だけどやはり継続時間は長くはなってもまだこれだけしか無理なよ
うだ。」

と言うといきなり人格を誠に戻す

返された瞬間にふらつきはしたもののなんとか踏みとどまりリアス達に向けて笑う

「いんばんわ」

力ない笑顔だが確かにその表情は誠のそれだった

発動

「大丈夫かよ!」

一誠の言葉と共にグレモリー眷属が駆け寄ってくる

「あ、ああ。とっさにあの人に助けを求めたんだ…といってもあの人が位しか話を聞いてくれなかったんだけど」

「なにはともあれ無事でよかったわ、マコト」

と俺を抱きしめるリアス先輩

だがそれを振り払う気力すら残ってなかった俺はなすがままにされながらそのままリアス先輩の胸の中で意識を手放した

そのとき一誠の野郎がめちゃくちゃ悔しそうな顔をしていたのは気のせいだと思っ

それから少しして俺は部室で目を覚ました

俺が(剥切さんだけど)倒してしまった悪魔ははぐれ悪魔というやつでリアス先輩の領地に踏み込んだから倒してくれと依頼が来ていたらしい

でもそれを俺が倒しちまったから色々面倒な事になってしまったようだ

少なくとも悪魔の世界に俺の存在が露見してしまう事は避けられないらしい

俺は平凡な生活にはもう戻れないっぽいぜ…

「人間のあなたが悪魔を倒してしまったそれに問題があるの。だからあなたを悪魔にしたいのだけどいいかしら?」

と提案してくるリアス先輩その手にはチェスで使われるような駒があつたのだが

「嘘…こんなことつてあり得るの？」

と驚愕の表情を浮かべていた

「どの駒にも反応しない…」

と朱乃さんも続けてつぶやく

「それってつまり…」

と木場も言葉を繋げる

「ポテンシャルが高すぎて私の持つてる駒では悪魔にすることが出来ない…」

どつやら俺は悪魔にはなれないらしい

その後、俺は悪魔、そして墮天使からの襲撃があつては困るとの事で先輩達の悪魔の仕事の手伝いをしている

一誠は魔力が足りないから魔法陣でのワープが出来ないようなので俺は一誠と一緒にチャリで依頼人の場所まで移動して仕事をしていた

今回やって来たのは普通の一軒家

一誠が言うにはマンションやアパートじゃないのは初めてらしい
だがここで俺は不自然な事に気付く

玄関が空いているのだ

「深夜に物騒だなあ…」

とつぶやく一誠

「確かに物騒だな」

その時俺の中の人達が騒ぎ出す
何かを察知したようだ

「一誠…なにがあるぞ…」

俺は一誠に忠告する

警戒しながら部屋を搜索する俺たち
すると一部屋だけ灯りがついていた
その部屋に入って見渡して俺はそれを見てしまった

死体だ、人間の死体

横で一誠が吐いている

普通の人間の精神ではこんなグロツちい殺し方なんて出来ない
壁には血文字で何か書かれてある

それをみた一誠が

「な、なんだ、「これ…」

とつぶやく

俺の知識で訳そうとしたとき背後から若い男の声で

「悪いことする人はおしおきよー。って聖なるお方の言葉を借りたの
な」

と聞こえてきた

俺たちはとっさに振り返り構える

見た感じ神父っぽい

さて、神父だと…?

悪魔の敵じゃないのか?

って事は現状的に悪魔と一緒にいる俺はあいつから見ればここで
殺された人間と同じ悪魔に頼る人間って事か?

これはまずい…しかもこいつ頭がイかれてる可能性が高い

誰か…何かないのか?

俺は中の奴らに声をかける

誰でもいいこの場を切り抜ける事が出来るなら誰でもいい！
俺たちを助けてくれ！

《その言葉、聞き受けた》

俺が中の奴らに交渉している間に一誠と神父の話は進んでおりど
うやら俺も悪魔の仲間と判断されたようだった

そしてあの国民的ロボアニメのビーム兵器であるビームサーベル
のような刀身を作る光の剣が現れる

そして神父が一誠に向かって走り出す

一誠は剣の一撃をかわしたが叫び声をあげる

銃声はしなかったがやつ銃からは煙が上がっている

「なあるほどお。光を使った銃弾かあい」

顎に手を当てながら今起こった現象を推理する誠

「そっちの人間さんは物分りが早くていいねえ。ぶっ殺したくなる」

といいながら凄スピードで俺に詰め寄り俺の体を真っ二つに両
断する

俺の体は上半身と下半身で別れ地面に落ちていく

「誠…」

と俺に向かって叫ぶ一誠

だけど意識ははつきりしてる

多分今俺になってる人の能力なんだろう

俺はまだ死んでない

「次は君だよ悪魔くん」

と神父が一誠に向かって振り返った所で

「おやおや？おかしいねえ？」

とニヤニヤ顔で神父を見つめる俺

「貴様…なんで生きて…」

と驚愕の表情を浮かべながら俺に問いかけるがそれよりも早く

「光の速度で蹴られた」とはあるかい？」

そう問いかけた時には既に足は蹴り切った後で神父はものすごいスピードで吹っ飛んで行く

「速度は、重さ…だよ」

「きーれたきれた、もうお前ぶち殺しだわ」

と立ち上がる神父

「ああ？殺されるのはてめえのほうだよ！」

と誠は光を放つ

だがそれはただの光では無い

学園都市第四位の持つ能力、原子崩しの能力により放たれた光だ

「ぬぁー…」

と光の刀身を盾にして防ぐ神父

だが高威力のレーザーをいつまでも耐えているほどの耐久力は無い

ついには剣の柄の部分から崩壊してしまった

だが原子崩しにも弱点は存在する

誠の身体には機械を埋め込んではいない

つまり標準を合わせる必要があるために連発は出来ないのだ

さらに威力もある程度まで弱めて放たなければ反動で自分の体自体が吹き飛んでしまう

そのために弱めたせいか神父はまだ生きていた

「」は逃げるに限る、おいてめえ覚えてるよ！」

と明らかかな捨て台詞をいいながら家から出て行く

その時に金髪のシスターの体を抱きかかえて逃げて行ったのを俺は黙ってみていた

その時だった、その金髪シスターを見た一誠がそのシスターの名前を呼んだ

「アーシアー！」

俺は神父を追いかけようとする一誠の手を掴んで制止する

「今のお前じゃあいつには勝てない…あのシスターさんがお前の知り合いなのはお前の反応を見てわかる。けど恐らくだがあの子は教会の者だ。悪魔であるお前がどうこうできることじゃ無い」

と俺は一誠を説得する

今はリアス先輩の所に戻るのが先だ

と一誠を黙らせた

そして歩いて学校へ戻って行った

この時にこの神父を逃がさなければあんなことにはならなかったのにと後悔することになるのはまた別の機会に話そう

ゲルド族の王

俺達は帰ってから全てのことをリアス先輩に話したけど状況は何一つ変わらないまま次の日になった

一誠の野郎は学校を休んでいる

なんでも部長のコネで話は学園につけてあるらしい理由は傷の療養

神父に与えられた傷が思っている以上に深かったらしい

あの後俺はアーシアの事を一誠から聞いた

希少な治癒の能力の神器を持っていて心優しい少女らしい

間違っても昨日の神父のような事をするような子じゃないみたいだ

そんなアーシアが攫われたという報告が入った

情報源は一誠だ

なんでも公園にいる時にたまたまアーシアと合致して一緒にいた所を一誠を殺した張本人であるレイナーレがアーシアを連れて行つたらしい

だが墮天使側の案件のため迂闊には手を出すことは出来ない、諦める

と待っていたのはリアス先輩の冷たい言葉

「あなた達が悪魔だから助けに行けないんですね」

「ええ、そう簡単に首を突っ込んでいい世界じゃないの」

「なら、俺が助けに行きます。俺は一誠が言うようにその子は悪い子じゃないと思います。」

だから…俺はあの子を助けに行きます」

「だめよ。許されないわ。いくらあなたが強い神器を宿しているからといってそれを扱うのはあなた。何回その神器を使って倒れているかわかっているの？」

「わかってますよ。俺自身が弱いことくらい。でも守れるものを守らないそんな奴に俺はなりたくないです。リアス先輩がなんと言おうと俺は行きますよ。それに今回は力強い奴が味方してくれるみたいですよ」

「守れるもの全部守るって言うの？なんて強欲な…」

「そりゃあ強欲ですよ。なんてったって俺は人間ですから」

「そう…もう勝手にしなさい。私と朱乃はやることがあるから」

そう言っ外に向かう

「それとイツセー？よく覚えておきなさい。兵士の駒の能力の事を」

と一誠に兵士の駒の能力を説明している間に俺は精神世界に潜ってあいつと話をする

『おい、本当にあの子を助けてくれるんだろうな』

『ワシはあの墮天使とやらに灸を据えてやるだけだ。その道中にそのシスターとやらは助けてやる』

『頼む…俺にはお前らしいないんだ』

俺の言葉に返事は無かったがあいつはその大きな背中で無言の返事を返してくれた…よくな気がした

木場曰くりアス先輩はちゃんとあの教会を戦場と認めてくれたらしい

それは一誠の駒の能力を発動するキーにもなるみたいだ

俺にはよく分からないが今の戦力的に恐らく1番弱いのは一誠だその一誠が少しでも強化されるならこっちとしても嬉しい限りだ

そして、俺たちの一時的なチーム、木場、子猫ちゃん、一誠に俺を合わせたシスター奪還チームが作られ奴らの本拠地である教会へと向かっていった

俺たちは目的の教会まで来ていた

木場が言うには恐らく聖堂の地下に儀式の場があるだろうつとのと

なんでも聖なる場所そこで神を否定する行為をすることによる自己満足や神への冒瀆に酔いしれるらしい

簡単に言えばいけない場所でいけない事をするみたいなものか
まあ儀式の場がわかればあとはあいつに任せればいい

そしてその儀式の場を隠していればあの人はその匂いに気付く
隠さないという負の思いをあの人は感じ取る

つまり俺自身はすぐに儀式の場に突入出来るだろうけどその儀式の場を守るやつだって存在するわけで教会に突入した俺たちの前に立っている先日の神父、フリードをなんとかしないとならない

一誠がフリードに向かって叫びつける

「おいーアーシアはどこだー」

「んー、その祭壇の下に地下への階段が隠されてます。そこから儀式が行われている祭儀場へ行けますぞ」

とあっさりばらしゃがった

あの人は今回も負けた

祭儀場へ道を見つける前に先にバラされるといった事で

だが祭儀場への道が分かればこっちのもんだ

「一誠任せなよ」

「おっ…」

と俺は祭儀場に向かって走る

だがそれを阻止するようにフリードが道を阻む

「そう簡単にいかせませんよっ…」

気に食わない笑い声を上げながら光の剣を構えるフリード

仕方ない頼むぜ…

「魔王…『ガノンドロフ…』」

右手の甲に紋章が浮かび上がる

神によって創られた伝説の代物

それに触れたものは望みを叶えることが出来るとされる古より伝わるもの《トライフォース》

力、知恵、勇氣、その三つのうち力を司るディンによって創られたトライフォースの一角力のトライフォースに認められた男が今かつて賢者によって己自身の腹を貫いた剣を手にフリードの前に立ち上がる

「目障りな餓鬼がいたものだ…」

「その目障りな餓鬼にやられるんだよっ…」

とガノンドロフに向かって斬りつける

だがそれすら軽くあしらうように受け流し無防備になった一瞬を見逃さず顔面を闇の力を纏って殴り抜く

「貴様らは先に行っている…」

と一誠達に告げるガノンドロフ

「だげぞ…」

と反論しようとする一誠を子猫ちゃんと木場が止める

「今は西園寺先輩に任せましょっ…」

「正直言っ僕達がここに居ても足手まといにしかならない…なら先に行ってアーシアさんを助けにいこっ…」

その説得を受け一誠はしぶしぶ祭儀場へと向かう

「誠……」は頼むぞー」

その言葉に返事は無かったが、誠はそのまま地下へと降りて行った

「あー、キレちゃった僕ちゃんキレちゃったよー」

とフリードが立ち上がる

「やっぱりあんたは殺さないと気が済まないね」

と再び突っ込んでくるがさっきと違い直前で跳躍そのまま背後に着地して背中を斬りにかかるフリード

だがその光の剣をガノンドロフは素手で掴んで 受け止めた

正確には闇の力で光を中和しているのだが

「貴様にはこの剣すら使うのは勿体無い」

そう言うただただ純粹なテレフォンパンチを放つ

するとさっきの一撃よりも遙かに吹っ飛んで行く

フリードの姿を確認せずともあの一撃をもらってしまえば誰でも再起不能になるだろう

それくらい威力の一撃だった

だが忘れないで貰おう

西園寺誠は人間だ、悪魔ではない事を

「あのような餓鬼がじゃばるとはな……いやそうは言ってもらえんか…
その餓鬼にしてやられたのだからな」

と軽く過去を振り返るとそのまま祭儀場へと向かっていった

そこで最悪の事が起こるなどこの時誠もガノンドロフも想像はしていなかった

理不尽

ガノンドロフはゆっくりとした歩調で祭儀場へと向かっていく
恐らくフリードは少しの間は動けないだろう

それ位のダメージは与えてあるはずだ

ガノンドロフが奴に見向きもしなかったのだから最悪死んではい
なくとも障害は残っているかもしれないな…

そして祭儀場まであと少しの所で中から女の叫び声が上がった

「まさか…」

とガノンドロフは中に入る

そこには緑色の光を全身から発するあの時の女の墮天使と金髪の
シスターらしき少女と大量の神父共

ガノンドロフは呟く

「すまない…ワシでは無理だったようだ…」

その言葉に俺は言葉を失う

『おい…ガノンドロフ…それって』

「今あの少女の命の灯火は消え失せた」

『嘘…だろ？』

「嘘ではない。ワシはこんなつまらん嘘など吐かん」

その言葉は酷く冷たく現実を俺たちに叩きつける

俺達の奪還する予定だったシスターアーシアは今死んだのだ

ガノンドロフの言葉を聞いた一誠はアーシアの元へを走り出す

それをフォローするように木場と子猫ちゃんも神父たちを倒しな
がら道を切り開く

その時、俺の中の一人が俺に向かって語りかける

『まだ終わってない』

と、その言葉を聞いた俺はガノンドロフにこいつに人格を変われと命令する

ガノンドロフは渋々了承し、俺に人格を戻す

「来い、悪平等『安心院なじみ』」

「全く、もしここが週刊少年ジャンプだったら主人公の覚醒フラグなのよね」

飄々とした態度で辺りを見渡す誠

「イツセー君と言ったかな、早く彼女を連れてここからでて行きなさい。邪魔だ」

「でも」

「全く…『神の視点』」

『アジアを連れて颯爽と出て行く』一誠

「無駄なことさせるもんじゃないよ。さあ君たちも出て行ってイツセー君をフォローしてきてね」

と笑顔で木場達に言う誠

「それとも無理矢理だしてやるのか？」

「いや、いいよ。ここは任せるよ西園寺君」

「今の僕の事は親しみを込めて安心院さんと呼びなさい」

「じゃあ安心院さんここは頼む」

「任せなさい」

その会話が終わると木場と子猫ちゃんの外に出て行く

「しかし任されたといっても普通しかいないんだね」ここには…呆れるよ。球磨川君なら」

『モブキャラのみなさーん。こんにちわー』

「で無力化した所だろうね」

「でも僕は優しいからスキル100個でやめておいてあげよう」

とついで神父の群れに突っ込んで行く

「めんどくさいしコレでいいや」

『ボス系スキル×1000』

漆黒宴において影武者が現れた時にわざわざ1人1ページを全て使ったあの安心院さんファン歓喜のあの時のあれを使う安心院さん

「なかなかいい勝負だったぜ」

無慈悲としか言いようのないスキル量、言い換えれば数の暴力だ
大量にいた神父達はもう存在しない

黒神めだかに

「なにーっ悪くないけど土下座する」
と言わせるだけある完全版安心院さん通称完全院さんは圧倒的力でねじ伏せた後

「ちてさて、くだらねーバトル漫画はこれでおしまい」
「来週からくだらねーラブコメが始まるぜ」

とピコースしながらそう告げる

最弱

「御機嫌よう、墮天使の皆さん」

リアス・グレモリーは3人の墮天使の元に来ていた
お供に同じグレモリー眷属である姫島朱乃を連れて

「今回の計画は貴方方独自の計画…であってるのかしら？」

とリアス・グレモリーは墮天使達に問い掛ける

墮天使達は

「冥土の土産に教えてやろう」

などといいペラペラと自分達の計画だと話し始める
そしていざリアス・グレモリーと姫島朱乃が墮天使を倒そうとした
時そいつは現れた

「なかなか面白い事になってるじゃないか。僕も混ぜてよ」

といきなり両者の真ん中に現れたのだ

「ムムムム…」

と、誠に対して問い掛けるリアス・グレモリー
それも当然の反応である

「あはあら、どうやってこの場所に現れたのでしょうか？」
といつもと変わらないにこにこ笑顔で質問を重ねる姫島先輩

「腑罪証明（アリバイブロック）。僕のスキルの一つさ」

といきなり現れた理由を説明する誠

だがリアス先輩や姫島先輩が攻撃をしない理由はあっても墮天使側には存在しない

そのやりとりを聞くまでもなく光の槍を誠に向かって投げ放つ

その光の槍を避ける間も無く心臓や脳に突き刺さる
明らかに致死量とわかる位の血を流して倒れる誠

それを見たりアス・グレモリーと姫島朱乃は駆け寄る
そして誠を殺された怒りで墮天使側に攻撃をしようとする魔力を込めた時である

パツ！とリアス・グレモリーの手を掴む手があった
誠の手である

「僕は大丈夫さ」

ゆらゆらと立ち上がる誠

その様子を見てこの場に居る全ての者が息を飲む

誠は確かに死んだ

心臓や脳を貫かれ死んだはずの人間が傷一つ無くへらへらとしながら立ち上がったのだ

「全く…安心院さんもめんどくさい事を押し付けてくれたもんだ」

「話を聞く限りじゃ墮天使側の総督さんに気に入られるためにあのアーシアって子の神器とやらを手に入れるってのが君達の計画だね

「？」

と問い掛ける

「ああそうだーそれでアザゼル様に！」

「甘えよ」

と墮天使の主張を否定する誠

「なっ……！」

「………」

「その甘え」

「嫌いじゃないぜ」

と否定しながらも肯定する誠に対してどう反応していいのかわからない面々

「ま、僕には関係ないけどねー！」

と墮天使、そしてグレモリー眷属両方に向けてネジで地面に貼り付ける

「これはどいついっしょとなの？マム」

「あらあら、これは……」

「僕が裏切らないと思った？」

とリアス先輩と姫島先輩に問い掛ける

「そんなわけないじゃん」

と飄々としながら告げる誠

「なにをー」

「僕は過負荷。誰よりも弱いから勝つためには手段は選ばない」

と得体の知れないオーラのよ様な吐き気がする雰囲気纏う
「ム」

「君たちは強い」

「僕なんかじゃ敵わないこと位重々承知だ」

「だからこれは保険だよ」

「大嘘憑き」

「君たちが持っている特殊な力を無かった事にした」

「これで君達はただの人間と同じさ」

「おいおい、卑怯だなんていうなよ？」

「これが過負荷だ」

「それじゃあねこれは貰って行くよ紅い髪のお嬢さん」

とリアス・グレモリーの持っていた転移用の魔法陣を取り上げこの
場を後にする誠

この場には力の失った墮天使も悪魔が「螺子」伏せられた後だけが
残っていた

魔法陣を使い再び教会に戻って来た誠は辺りを見渡すとそこには
アーシアを抱えながら涙を流す一誠がいた

『おやおや？ イッセー君どーしたんだい？』

と空気の読めないハイテンションで一誠に問い掛ける

「これが泣かずにいられるかよー」

と一誠は怒鳴る

「アーシアは…アーシアはー」

と誠の方を振り返る

だがそこに誠の姿はなかった

「誠…？」

と疑問に思ったその時だった

「イッセーさん？」

とアーシアが上半身を起こしながら問い掛けた

「アーシ……ア？」

とアーシアの名前を切れ切れに呼ぶ一誠

「そんな…確かにアーシアさんは神器を抜かれて」

「はい。死んでいました」

と木場と子猫ちゃんが続く

何故生き返ったのかわからずに一誠はアーシアを抱き締める

「帰ろっ、アーシア」

「全く…僕も甘くなつたもんだ」

「あんなお涙で心を動かされるなんてね」

「また勝てなかったよ」

「ま、今はそんな事を話している場合じゃないか」

「これからの話をしようか墮天使、レイナーレさん」

と胸に長いマイナス螺子の刺さつた状態で螺子で壁に貼り付けられているレイナーレ

なぜかその髪は黒では無く白い

そんな状態のレイナーレに話しかける誠

「抵抗しても無駄だよ」

「今の君にそれを解除するだけの力は存在していないからね」

「却本作り」

「君は僕と同じレベルまで下がっているんだからね」

「なにが望みだ」

「望みなんてないさ」

「ただ僕達のこれからに協力してくれれば僕はなにもしない」

「なにが望みなんてないだ」

「結局はそれが望みなんだろう」

「仲間になれってというのがな」

『』「違うよ、誰も仲間になれなんて言ってないさ」

『』「ただ協力してくれればそれでいい」

と吐き気を催す雰囲気を纏いながらにやにやと話を続ける

『』「するしないは君の勝手だよ」

遠回しの脅迫をかける誠

「分かった。協力しよう」

『』「よかった！ありがとうね」

とさつきまでの雰囲気が一瞬で無くなる

『』「それじゃあ約束だ」

と言うと人格を別の人物に変える

「西園寺誠が刻もつ」

その目にはとある王の証が記されており

「貴様に…偽りの記憶を」

「わあああああああああ！」

とそこにはレイナーレの悲鳴が響き渡ったが誰も聞こえるものはいなかった…

接触

あの事件の後俺は数日間寝込んだ
連続で何人もの人に身体を使われたのだ

ガタが来ない訳がない
だから思った

せめて連続2人で使っても大丈夫なようになりたい
でもどうすればいいかわからない
単に慣れればいいというわけでもない様だ

今の俺に出来るのは精々1度俺の身体を使ったことのあるやつを
呼び出すことくらい

つまりガノンドロフ、シュナイゼル、剥切、安心院、球磨川、シャルル、一方通行はいつでも呼び出せる

けどやはり人間では扱えないような力を使うとそのぶん身体に負担をかけてしまう

が人格が変わっても力によって起きたことは変わらないようで現
に今はレイナーレが満足に動けない俺の世話をしてくれている

球磨川禊が交渉し、シャルル・ジ・ブリタニアが記憶を書き換えた
王の力であるギアスを用いられたレイナーレの中で西園寺誠とい
う男は絶対的な存在となっている

いうならば俺専属の付き人みたいなものだ

以前のようにお喋りではなく物静かになっている

そして球磨川禊がやらかした事でリアス先輩達とはちょっと疎遠
になってしまった

そりゃよくしてた奴からあんな仕打ちを受けたらそうなるわなあ

…

「マコト、あなたはやはり危険よ」

「私達にしたことから考えてあなたはその神器を使いこなせていないの」

「敵味方見境なく攻撃するなんてありえないわ」

あの後言われた言葉である

球磨川禊の過負荷である《大嘘憑き》は因果に干渉して物事をなかつたことにするスキルだ

だが安心院さんの置き土産であるスキル《実力勝負》と合成したことにより《安心大嘘憑き》となりなかつたことにしたことが3分後に元に戻るスキルとなった

尚、球磨川禊現在は《虚数大嘘憑き》となつて過去になかつたことにしたことでもそのなかつたことにした事実をなかつたことに出来る、取り返しの付くスキルとなつてはいるのだが

それによりなかつたことにしたりアス先輩達の力はもとは戻つてはいる

だがそんな因果に干渉するような力を持つ人間を放っておく事など出来ない

この辺りを任されている悪魔であるリアス先輩はなおさらである

「ありえないなんてことはありえない」

欲の塊の様な人格に無理矢理俺を乗っ取られる

「え？」

「この世界にありえないなんてことはありえないんだよ」

「現にこいつはてめえらを攻撃している」

「それは…」

「じゃあてめえらの定義で答えてやるよ」

「俺も、俺たちもてめえらの事を味方だなんて思つてねえんだよ」

「それはどういう意味かしら？」

「おいおい、勘も悪けりゃ頭も悪いのか」

「俺らはお前らのことなんか一度も味方だと判断した覚えはないってんだよ」

「それは本当なの？」

「俺は球磨川と違って嘘はつかねえよ」

「とりあえず、魔王様からの返答があるまであなたは自宅待機よ」

という事があったので俺は家でのおんびり身体を休めている

時間的には結構経っているのに今だに謹慎は解けない

だから余った時間は定期的にレイナーレと模擬戦のようなものを行って神器の能力に耐えられる身体を作ろうと試みてはいるもの
やはり墮天使と人間の差は大きいようだ

今日も家の裏の山でレイナーレと模擬戦を行っていたのだがそこにいきなりリアス先輩とよく似た紅い髪の男性が現れた

「西園寺誠君…であってるかな？」

と問いかけてくるその男性

「魔王がわざわざ人間界になんのようだ？」

と俺をかばう様に前に出て槍を構えるレイナーレ
だがその手は震えている

「魔王…」

俺はレイナーレの言葉を聞いてその男性に問いかける

「これはこれは失礼した、僕は魔王の一人であるサーゼクス・ルシ

「ファーという」

超大物さんでした

「君のことは妹であるリアスから聞いているよ」

「なんでも神滅具並の実力を持った神器らしいね」

「……………」

俺は黙ったまま話を聞く

「まあそう構えなくてもいい」

「遅くなってしまったが君の処分をどうするかを話しに来ただけだから」

「俺の処分、どうなるんですか？」

「今日の夜、三代勢力による会合が行われる。そこで決めたいと思う」

「だから今夜駒王学園に来てくれるかい？」

「わかりました、レイナーレも連れて行っていいですか？」

「やめておいた方がいいと思うよ。墮天使から追放された彼女を迂闊に墮天使総督であるアザゼルの前に出すのは僕でも気が引けるよ」

「そうですね、なら僕にその会合である人物が変わって出てもいいですか？」

「それは保険のためかい？」

「はい。流石にただの人間がそんな所に出るのは怖いですから」

「わかった。許可するよ」

「それじゃあ今夜また会おう」

という魔法陣を展開しワープしていくサーゼクスさん

「レイナーレ、ごめん今回は俺一人で行くよ」

「大丈夫ですか？」

と心配そうにするレイナーレ

「大丈夫だよ。俺にはみんながいるから」

とレイナーレをなだめて時間になるまで家で待機

そして夜になって学校に向けて出発した

会合

指定された時間通りに俺は学校へ来た

そして会議室の扉をノックして中に入る

そこには先ほど出会ったサーゼクスさんの他にメイド服の人、小さな少女みたいな人、金の翼の男の人と天使とわかる女の人、そして黒い翼を生やしたおじさんみたいな人に青年が一人

後はグレモリー眷属に会長さんが居た

「彼が《特異点》である西園寺誠です」

とリアス先輩が俺の紹介をしてくれる

「その席に座りなさい」

とサーゼクスさんの指示を受け、メイド服の人が椅子を引いてくれた

俺はその席に座りある人に人格を交代する

恐らくこういう場ではこいつ以外に適任は居ないだろう

そのために俺はあれからずっとこいつを説得してたんだから

人格が変わったことを確認したサーゼクスさんが言う

「彼が来たことで会談の条件が整った」

「これより会談の議題の一つである《特異点》西園寺誠の処遇についての話し合いを始める」

会談は割と順調に進んでは居た

皆の意見はこうだった

今回の会談は所謂三代勢力の不可侵条約を結ぶ様なものが元だったらしい

そのため俺はどっちつかずの立場

簡単に言えば各勢力に対する抑止力になると言うこと

それが条件で自由にしてくれるという事だ

要するにこの三代勢力のトップ達から見ても俺は抑止力となる位恐ろしい存在らしい

そしてその時ミカエルさん(さっきの金の翼の人だ)が今の俺に問いかけようと口を開いた

だが

「僕は神だよ。ミカエル」

質問よりも先に俺が答える

いや正確には八才の人格が表にでた俺である

その言葉に辺りは息を飲む

「僕から神と同じ波長のよくなものを感じ取ったんだろっ」

「正しい。僕の持ち霊はG・S」

「今はこの身体に収まってはいるが元々はこの世界をあまねく魂の存在だ」

「だが勘違いしないでほしい」

「きみ達が知っている死した神とは僕は違っ」

「神、の定義が僕達と君達とは違っからね」

「ははは！なかなかおもしれえ神器だなやっぱりてめえの神器はよお」

と黒い翼の男の人、アザゼルが笑っ

「口を慎めよ。アザゼル。僕がその気になればこの世界などいつでも滅ぼせる」

と殺気を込めてアザゼルに言い放つ

「これはこれは失礼」

とアザゼルが冷や汗をかきながら答える

「この会談で一つ気になった事がある」

とハオはアザゼルの連れてきた青年を指差した

「なぜ裏切り者がここにいる？」

その言葉を皆が認識した時だった

なんとも言えない奇妙な感覚が辺りを包み込んだ
だが

「ちつちえな」

ハオにはそれは通用しなかった

グレモリー眷属の一人であるギヤスパー・ヴラディの神器の能力

時間停止 の効果だったのだが実力が上のものには通用しないらしくミカエルやアザゼル、サーゼクスなど実力者は停止して居ない

だが問題はそれではなくハオの言った言葉である

「ヴァーリ・ルシファーなぜ貴様みたいなやつがここにいる？」

「!!」

時間停止していない者たち全てが驚く

ヴァーリ・ルシファーと呼ばれた男はなぜ分かったのかという驚き

を

他の人はルシファーだと！という驚きを

「貴様、心が読めるのか」

「そろそろなんだ？カテレア・レヴィアタンが来るのか」

とヴァーリから次の作戦を先読みするハオ

「そいつもちつちえな」

「ここにいる奴らで片が付く」

「だが白龍皇お前だけは僕が相手になろう」

「ここにいるやつでは雑魚すぎて相手にならないだろう？」

と勝手に話を進めるハオ

「アザゼル、お前は封じた龍の力を思う存分に使うといい」

「なんでそのことを！」

「黙れ、さもなければ貴様の黒歴史である剣の名をここで言つてやるのか？」

「リアス・グレモリーはキャスリングとやらでさっさと吸血鬼を助けてっす」

「え、ええ」

「兵藤一誠、貴様も着いていけ」

「お、おっ……」

「早くしろ、カテレア・レヴィアタンとやらが来るぞ」

その時魔法陣が展開され一人の美女が現れた

のだが

「ちっちえな」

ハオの一撃によりなにも言葉を発する間もなく退場するカテレア・レヴィアタン

「そんな、仮にも魔王の血を引く者なのに…」
と口にするサーゼクス

「旧魔王派とやらは禍の団とやらに協力することをきめたらしい」

とハオは言う

そして外に飛び出した

「いい、ヴァーリ・ルシファー。遊んでやる」

そうヴァーリに言い挑発するハオ

「面白い、禁手」

白い鎧を身に纏ったヴァーリがハオに向かって飛翔するだが

「ちっちえな」

ハオはG・SをO・Sする

「自身を神と言い張るだけの事はある…」

ヴァーリは億さずハオに向かって突っ込んでくる

だがハオはその場に太陽を作り出す

「大宇宙の小さな地球、その中でも小さな人間」

「ちっちえな」

「太陽面爆発」

作り出した太陽からフレアを放つ

だがそれをヴァーリは半減の力を用いダメージを軽減させる

「なかなかやるじゃないか」

「これで…終わりか？」

ヴァーリは立ち上がりながら言ったが

「太陽の表面から数万kmまで立ち上る真紅のガス柱」

「紅炎」

超高温の炎の柱がヴァーリを襲う

いくら半減の力を用いダメージを軽減させたとしてもそのダメージは大きい

「くそー！近寄れない…！」

「まだいくぞ」

その言葉にヴァーリは絶望に近い表情を浮かべる

「ガスと氷からなる凶兆のほうき星」

「彗星」

「くっ…！」

残る力を振り絞りなんとか彗星を受け止める

だがこれで終わるほどハオは優しくはない

「ダメ押しだ」

「燃やし尽くせぬ天よりの使者」

「隕石」

その隕石の集団に飲み込まれるヴァーリ
それを見ていた他の者たちからすればもはや絶望しかないだろう
歴代最強の白龍皇と呼ばれるヴァーリをおもちゃ扱いする誠の姿
に

「まだ…やられるわけにはいかない」

「せっかく面白くなって来たんだ」

と立ちあがるヴァーリ

「…良いだろう」

「これで絶望を与える準備は整った」

「アザゼル、ここの結界はどんな事があっても壊れないのだろうか？」

「あ、ああ今の技術力全てを投資した結界だ。壊れることはない」

「そうか、それにもう吸血鬼は助けられているだろう。この場から離れよ今すぐ」

「おい！今すぐここから出るぞ！」

とアザゼル達は転移魔法陣で結界外へと転移する

「ヴァーリ・ルシファーよ。力の限りを尽くしそれでもなお敵わぬ力」

「星の進化の最終段階」

「銀河に及ぶ大爆発」

「超新星」

壊れることのない結界が壊れるかというくらいの大爆発が辺りを包み込む

学校は粉々に砕け散り後にはなににも残ってはいない

だがヴァーリは生きていた

「はあはあ…まさか覇龍を使わされるとはな…」

ドラゴンなどを封じた神器でその力を強引に開放する禁じ手

発動させれば一時的に神をも上回る力を発揮するが、それと引き換えに命を落とすか寿命を著しく縮めるといふそれを発動させたヴァーリ

ヴァーリの場合は溢れる魔力を使うことで寿命を削る代わりにしているためまだ大丈夫な方である

だが、彼にとってこれは奥の手であることも確かである

「そして、星が死んだ後に残るもの」

「まだ…続くのか…」

「大質量星の爆発は重力崩壊によるものだ」

「星が消え行き場を無くした重力は際限なく圧縮されて」

「やがて超高密度の重力場を作り出す」

「まさか…」

とヴァーリの顔に等々絶望の表情が浮かぶ

「ブラックホール」

「はははははは！」

「これに吸い込まれたが最後」

「お前の魂は無限に収縮し2度と出られることはない」

「くっ！」

せめてものと抵抗を見せるヴァーリ

だがもはや体力も残ってはおらず半減の力も発動しない

しかしいきなりハ才はO・Sを解いた

「ちっちえな」

ヴァーリは助かったと思いきや腰を落とす

禁手も解けていた

「アザゼルめ、なにが壊れることはないだ」

会合前に張ってあった結界は今はどこにも見当たらないのだ

「この程度耐えられなくてどうする」

ハ才はヴァーリに目もくれず歩いて何処かへ行ってしまう

アザゼル達もそんな誠を止める事など出来ず何処かへ行くのを見つめている

ハ才は最後にこう呟いて帰って行った

「じじい、まじい、まじい、まじい、ちっちなな」

冥界へ

例の一件以来俺はリアス先輩達とは全く関わりを持たなくなってしまった

一誠は例外で今でもよく話したりはする

「今度、俺らは冥界に行くんだってよ」

「冥界？」

と俺は聞き返す

「ああ、部長の里帰りと眷属悪魔の紹介に、新鋭の若手悪魔の会合、それで俺らの修行だってよ」

「修行？」

「アザゼル先生から修行してくれって言ってた」

「あの人か……」

と八才の人格時に読んだ名前を思い出し笑を堪える誠

「でも、あの人実質墮天使のトップなんだもんな」

「いい修行出来るんじゃないのか？」

「それなんだけだよ……お前も来ないか？ってアザゼル先生が言ってんだけどうする？」

「俺？なんで俺なんだよ」

「アザゼル先生が言うには」

「あの時攻撃を止めた理由は結界の崩壊だけじゃねえはずだ。本人である誠の方の身体、そっちへの負担がかかり過ぎていたからだろう。強過ぎる力を受け止める器がまだ出来上がって無い、だからあの時攻撃を止めたんだ」

「って言うってたから一緒に修行して力をつけないかって話だ」

流石アザゼルだ

墮天使総督をしているだけある

あの時のやりとりで俺の課題を見つけられたんだから
まあレイナーレとの修行で程々には力もついてはきているはずだ
じゃなかったら八才もあそこまでの技を出さなかっただろう
多分G・Sを出した時に俺の身体が耐えられなくなったと思う
つまりそれなりに力はあるについてきている
ならここはびしっと一発やってやるか

「わかった、俺も行く」

と言うことで只今俺は冥界行きの列車に乗っている

俺はグレモリー眷属から完全に警戒されているためか一番後ろの

車両で1人で乗っている

まあここなら他の人に邪魔されずに中の奴らと交渉出来る
俺は精神世界へダイブし新たな力の獲得に向けて出発した

「お眠りの所、すみません」

という声で俺は精神世界から現実世界へと引き戻される

「あ、はっ」

俺に声をかけて来たのは白い顎髭のお爺さんだ

見た目からして恐らく車掌さんだろう

「あなたは人間ですので悪魔としての入国許可は出来ません」

「え、じゃあ冥界に入れられないんですか？」

「魔王サーゼクス様の特例によりこちらをつけていただければ結構で
ございます」

と腕輪を取り出す車掌さん

俺はそれを受け取り身に着ける

「ありがとうございます。これにて入国手続きも終了でございます」

と言うと車掌さんは戻って行った

それと入れ違いになるようにアザゼルが中に入ってくる

「よお、マト」

「なんですか、閃光と暗黒の龍絶剣総督」

「な…」

「冗談です。誰にもいいませんよ」

「所で何故俺をここに？」

「イツセーから聞いてないのか？」

「いえ、俺は真意を聞いているんです。建前じゃなく」

「まあわかりやすく言えばお前とグレモリー眷属との和解、《特異点》としてのお前の紹介。こんな所だな」

「なるほど…つまり俺は釣られたって事ですね」

「まあいいですよ。ある条件さえ飲んでくれれば」

と俺は交渉に入る

「塔上子猫と木場祐斗それに吸血鬼の子を俺に任せてくれませんか」
「？」

「おいおい、どういつつもりだ？」

「僕はなにをしにここに来たんですか？修行ですよ修行」

「はは！こいつはとんだバケモンを抱え込んだか」

「いいだろうそいつらはお前に任せる」

「はい、では後ほど」

さっきの精神世界ダイブで説き伏せた吸血鬼、大剣豪、魔王がざわめくのが分かった

七大罪

部長の家に着いて次の日

イツセーの野郎は朝から教育係りの悪魔さん達から勉強をさせられている

俺は悪魔じゃないからいいらしい

勉強しといて損は無いだろうけどそんなめんどくさいことしてるひまがない

「そろそろリアス達も帰ってくる。帰って着たらこないだ話した顔合わせにでて貰うからな」

とアザゼルから連絡が入ってきたので準備に入る

一応特異点として紹介されるのでそれなりの正装で行かなくてはならないらしく用意されたスーツを着る

そしてその時が来るまで再び精神世界にダイブしあいつらと話を
する

今回コンタクトを取るやつは七大罪と呼ばれる奴らだ

人間が生まれつき持っているという七つの罪を具現化したような奴らだからかなり心してかからないといけない

これまで何度かコンタクトを取ってはいるが好感触を得たのは3人だけ

特に嫉妬を司る者が1番ややこしいきちんと話を聞いてくれない

本当に厄介な奴らだ

だが諦めずにコンタクトを取り続ける

そのあと俺は起こされ電車に乗って移動を始めた

その時にリアス先輩達がちやほやされてた

別に僻んでるわけじゃないけどうざかったな…

憧れの的なんだろうけどそれに縋る奴らってのを見るのは正直嫌だ

そーゆーのって自分がそこにたどり着けないから他人を持ち上げ自分はそこに憧れてますみたいにアピールしてるみたいだから

だからだろっ表情が冷めてたらしく塔城が俺に話しかけてきた

「先輩…顔が怖いです」

「え？」

そんな表情をしてる自覚が無かったが負の感情を抱いてたのは事実だ

塔城が俺を現実に戻してくれたことに感謝する

「わるい」

「いえ、大丈夫です」

塔城のおかげで悪い流れにならなく済んだ俺はそのまま地下鉄を乗り換え移動する

着いたのは都市で一番大きな建物の地下にあるホームだった

「もう一度確認するわ。何が起こっても平常心でいること。何を言われても手を出さないこと。上にいるのは将来の私達のライバルたちよ。無様な姿は見せられない」

とリアス先輩が眷属たちに言い聞かせている

まあ俺は手を出さなくても他のやつが手を出す可能性があるわけ
で…

特にハオ、安心院さんクラスが出張ってきたら俺でも止めらんない
よ…

おい、お前らこれはフリじゃねえからな？

安心院さんお前は絶対にでるなよ？

いくら面白そうだからといってもダメだからな？

ホールに入る前にアザゼルに止められる

「お前、中では堂々としとけよ。最悪誰か使ってもいい。舐められる
ような事だけは絶対に避ける。じゃねえと特異点としての威厳がな
くなっちまう」

と、忠告をうける

要は舐められたら締めればいって事だろう

そして俺はホールに入って行った

そのときだった

物凄い破壊音が響き渡り中では一触即発といった雰囲気の中の
チームが存在していた

見た目ヤンキーの男がメガネの女性悪魔に下品なことを言ってい
る

処女がどうとか開通式がどうとか

その話を聞いた途端七大罪の一人が動いた

「残念だったな兄ちゃん。この女は俺のもんだ」

と眼鏡の女性悪魔に肩を組みながら挑発する

「なっ…」

「ああ？」

と顔を赤らめながらたじろぐ女性悪魔と俺に向かって敵意を剥き出しにするヤンキー悪魔

その様子を見ていたリアス先輩は頭を抱え、一緒にいた若手悪魔N
O・Iのサイラオーグ・バルは止めに入るために寄ってくる

「アガレスの姫シーグヴァイラ、グラシャラボラス家の凶兇ゼファードル、そして人間よ。これ以上やるなら、俺が相手をする。いいか、いきなりだが、これは最後通達だ。次の言動次第では俺は拳を容赦無く放つ」

と止めに入るサイラオーグ

だがヤンキー悪魔はその挑発に乗っかり思いっきり殴り飛ばされる

「いいね、いいね、気に食わねえ奴は殴り飛ばす。そんなスタイル俺は嫌いじゃねえ」

とシーグヴァイラと呼ばれた女性悪魔の肩を組んだまま俺はサイラオーグに向かい言う

「なぜここに人間が居るのは分からんが貴様もあなりたいのか…」?

とヤンキー悪魔の方を指すサイラオーグ

「中々の自信じゃねえか。やれるもんならやってみな」

と言いつ切る前にサイラオーグは俺に向かって拳を振るう

だがそこに待っていたのは無傷の誠と信じられないものを見たという表情のシーグヴァイラ、そしてサイラオーグである

「人間がこの俺の拳を受け止めるなど…ありえない…」

「ありえないなんて事はあり得ない…現に起きちまってんだからよ」

「貴様、何者だ」

「元々は人造人間だがいまは違うな…今は人間だ、《特異点》と呼ばれるな」

その言葉を放った瞬間会場が騒然とした

あの白龍皇をぼこぼこにした？

神を呼んだとか聞くぞ

時間を捻じ曲げるらしい

死んでも生き返ったらしいぞ

などと所々盛られてある噂話の流れで居るようだ

「まあ嬢ちゃん、化粧直してこいや。せっかくの美人な顔が台無しだぜ？」

「わ、わかってます」

と赤面したまま走ってホールを後にする

「ああ、ああ、せっかくのパーティが台無しだ。おい、このヘタレの仲間どこだ？直せ」

と人間が出せるような殺気ではない何かを発する

だがあまりに強すぎるためそれを感じ取れたのは1部だけだった

「私はシーグヴァイラ・アガレス。大公、アガレス家の次期当主です」
と俺の隣のシーグヴァイラが挨拶をする

とここに居るみんなが挨拶をしていく
そして俺の番になった
因みにまだ人格は変わってない
というかわ変わらせてくれない

「俺の名前は西園寺誠だ。《特異点》とよばれてる」

と自己紹介をするまともにしてくれてよかった…と胸をなでおろした瞬間

「先に言っておく」

「俺は強欲でなあ、金も欲しい！女も欲しい！地位も名誉も、この世の全てが欲しい！」

「邪魔する奴は皆ぶっ潰してやる」

とこの場で言い切るグリード

呆れた顔を浮かべるリアス先輩やその眷属

その言葉に笑がこみ上げ笑い出す他の悪魔たち

「人間」ときがとんだ大事を」

といった感じである

誠は腕をアスタロト家の次期当主に向かい伸ばす

？を浮かべる面々

その次の瞬間二本の指が伸びアスタロトの頬を切り裂く

「舐められるのは嫌いじゃないの」

と指を戻しながらそう言う誠

「コレだからあなたたちみたいなのは嫌いなんですよ」

と影を蠢かせながらいい

「だからこそ駒にすれば面白いのだがな」

と鋭い眼光で悪魔達を釘付けにする

「貴様…何者だ…」

と問いかけるサイラオーグ

「いや、質問を間違えた。貴様…何人居る」

「あちゃーやっぱ気づく奴は気づくもんだね」

「答えは俺も知らないよ」

とお手上げ〜といった風にサイラオーグに言う誠

「そうだな、まあ元々俺らは一つだったわけだからこつやって俺の人格が表でもプライドの力とかは使えるんだけどまあ《特異点》様様だな」

「はあ…説明すんのめんどくせえ」

初対面の奴らから見れば情緒不安定のようにしか見えなくもない
だがそれを思わせないだけと力を放っているのだ

そのとき使用人が入ってきてついに行事とやらが始まりを告げる